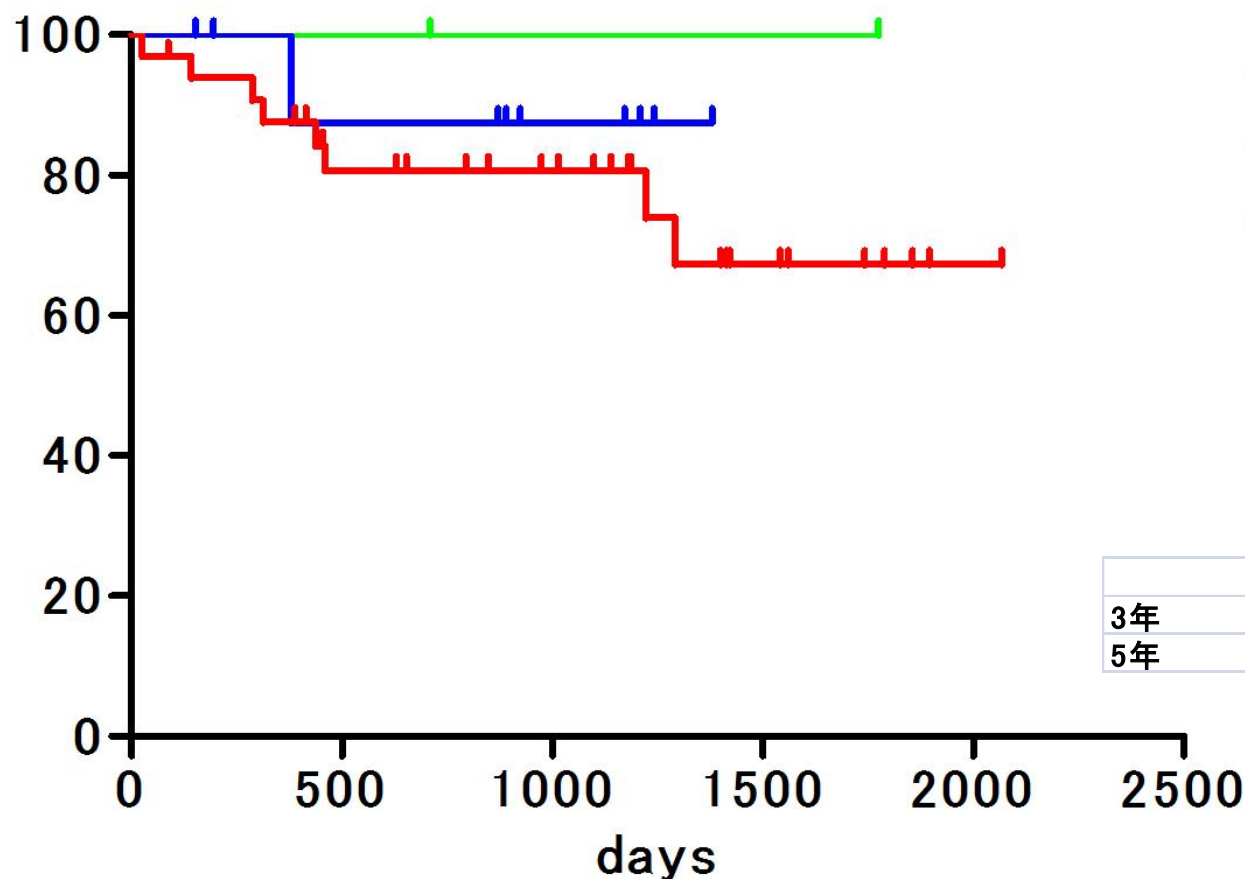


上顎洞癌疾患特異的生存率

2008年9月～2012年8月: 45例



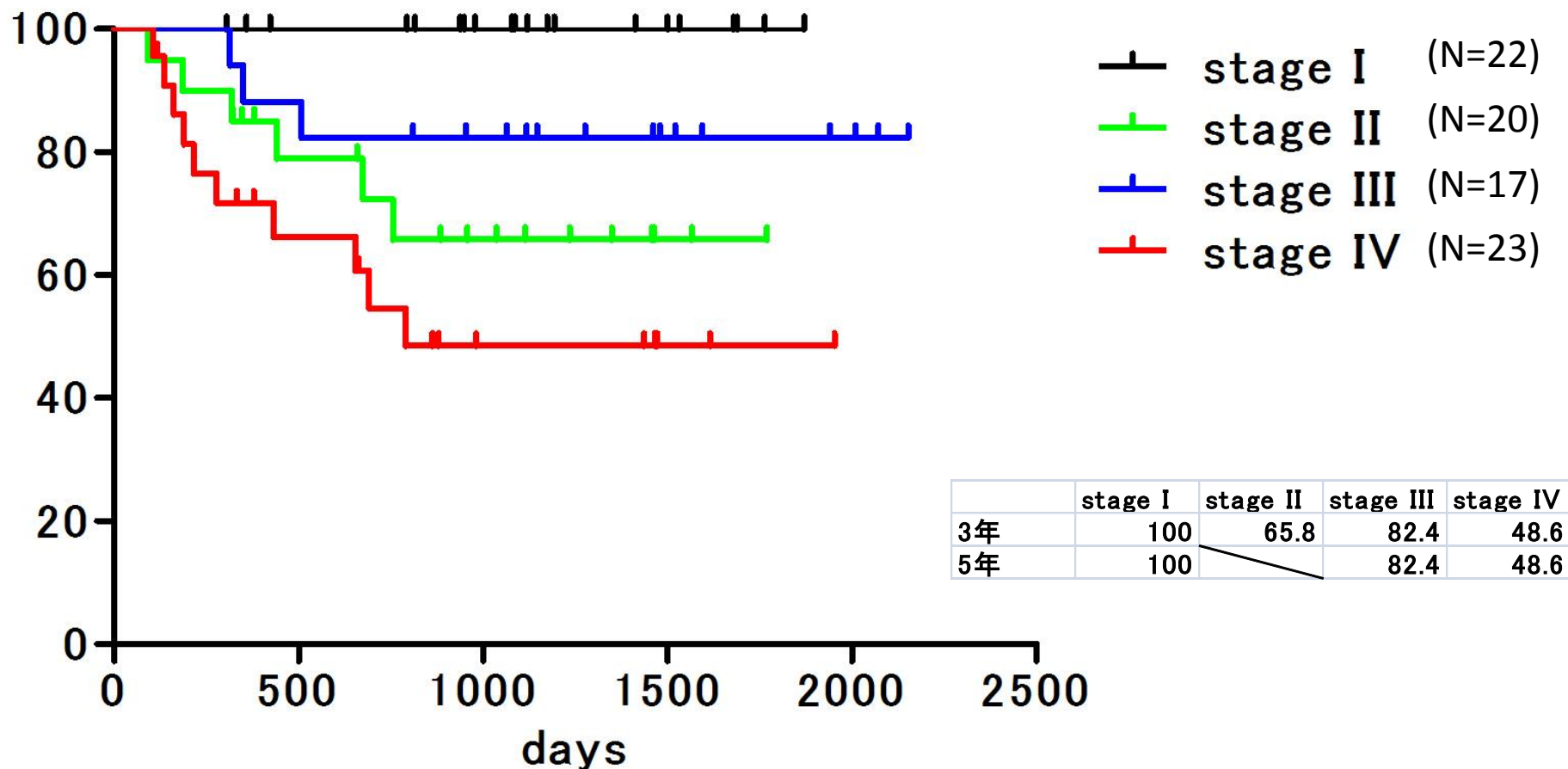
stage II (N=2)
stage III (N=10)
stage IV (N=33)

	stage I	stage II	stage III	stage IV
3年		100	87.5	80.7
5年				67.3

上顎洞癌ではI期、II期は稀です。IV期では原発巣がかなり進行した例が大半を占めますが、これらを手術あるいは、選択的動注放射線同時併用療法、あるいは両者を組み合わせて治療しています。

舌癌疾患特異的生存率

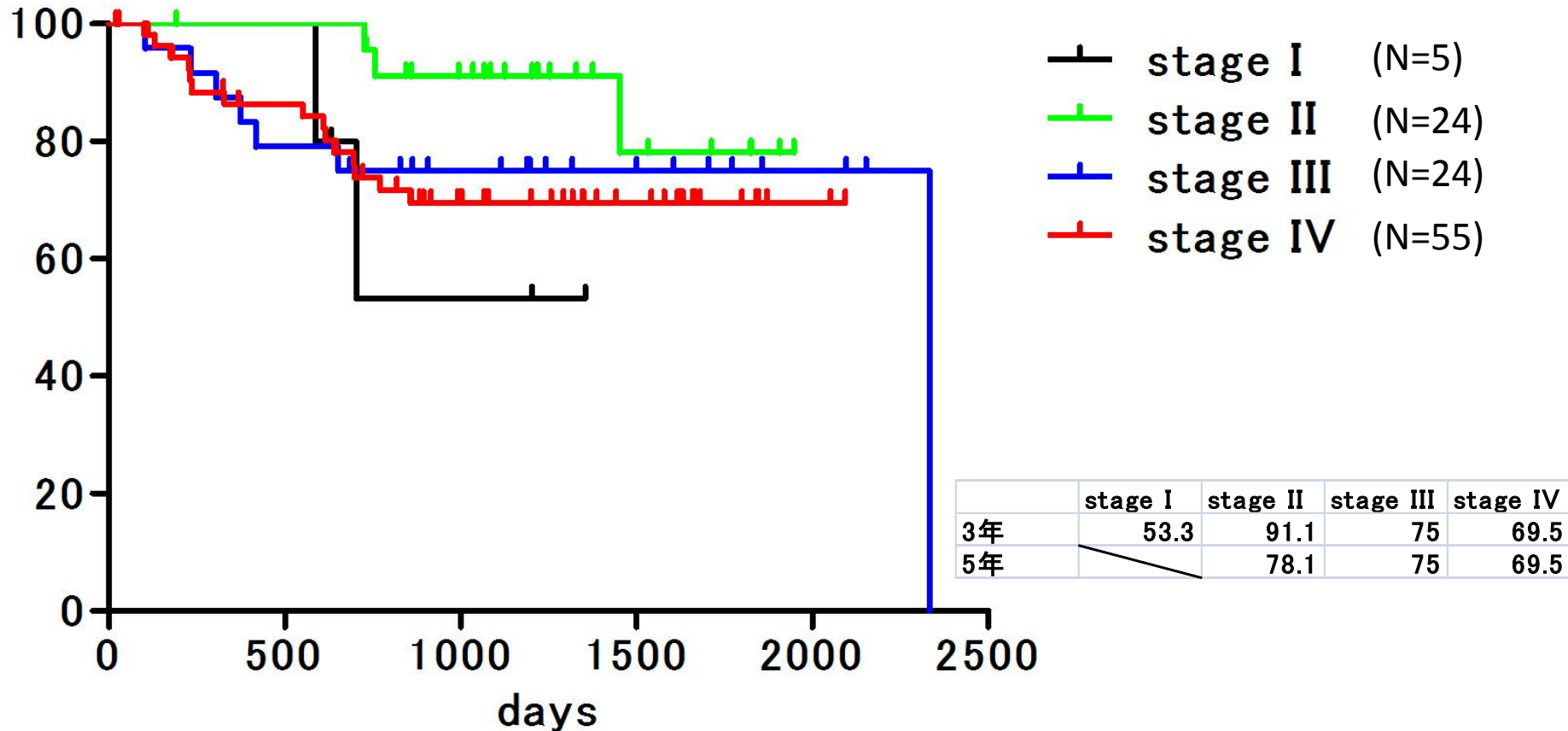
2008年9月～2012年8月: 82例



Ⅱ期の成績が不良なのは口腔内から舌にできた癌病巣を切除したあとに、首のリンパ節転移を来した例が多かったのが一つの原因かもしれません。進行例では多発したリンパ節転移を制御することと、舌の筋肉の中に深くしみこむような癌を嚥下・構音の機能を保ちつつしっかり切除することが重要になります。

中咽頭癌疾患特異的生存率

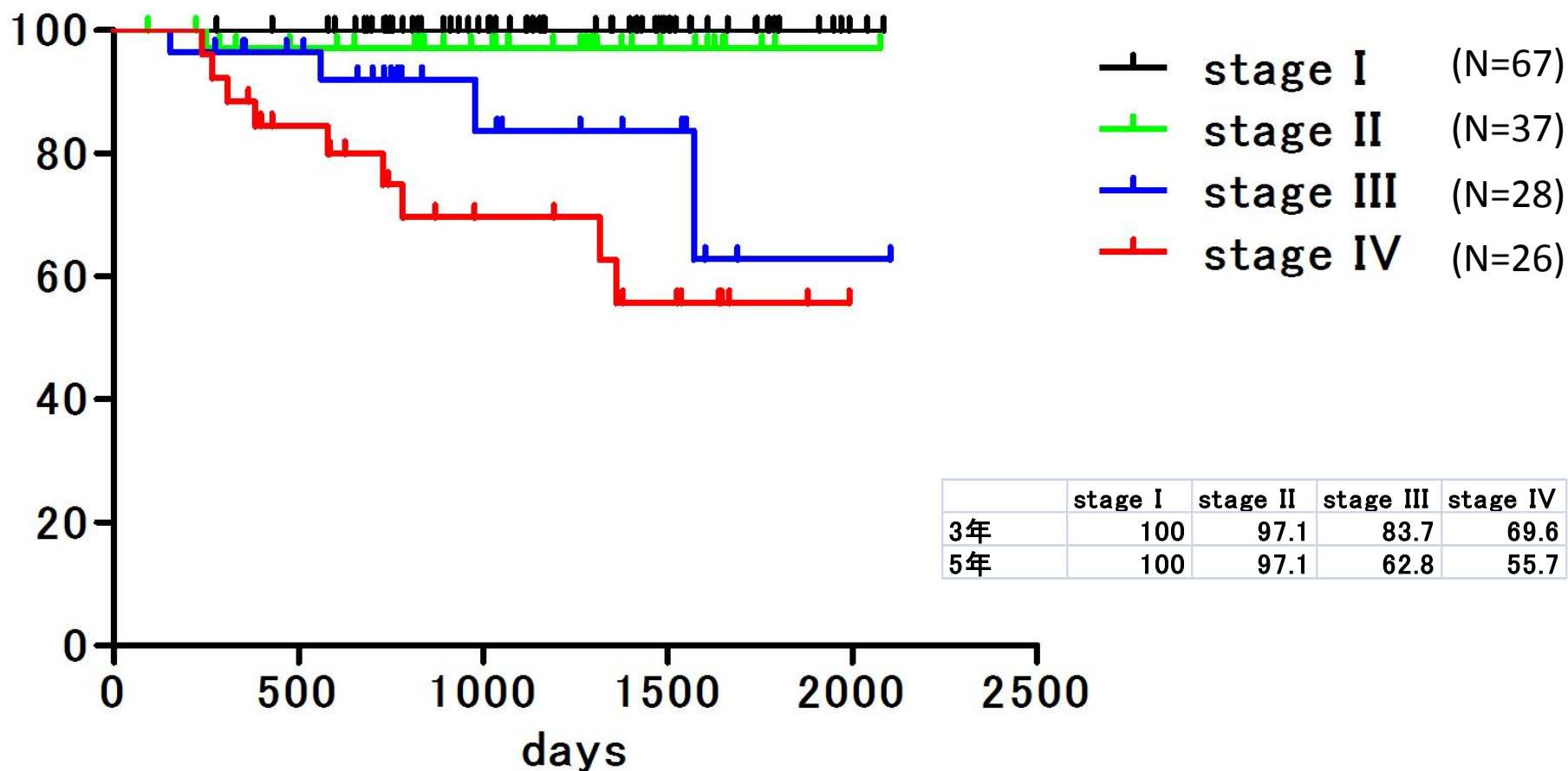
2008年9月～2012年8月: 108例



I期は症例数が少なくあてにならないかもしれません。
頭頸部癌の中では比較的良好な成績を示す癌といえますが、進行中咽頭癌の治療では、治療後の嚥下機能を良好に保つことが重要になります。
近年、ヒト乳頭腫ウイルスが発がんに関与しているといわれ、それによって治療に対する反応が異なることが言われていますが、上記の結果はヒト乳頭腫ウイルスの有無別に示したものではありません。

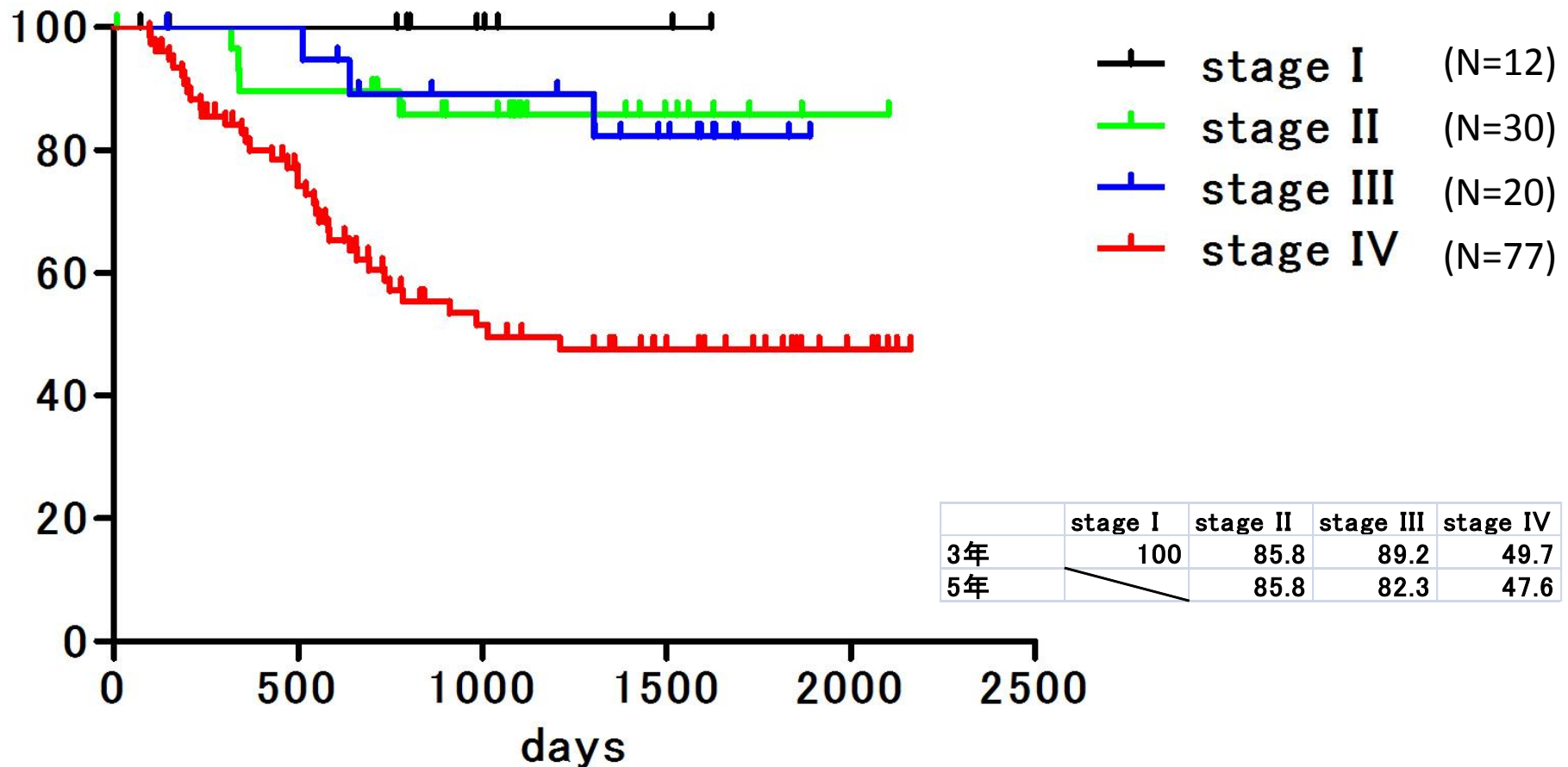
喉頭癌疾患特異的生存率

2008年9月～2012年8月: 158例



喉頭癌ではI期、II期の成績は良好で、全体でも比較的成績が良好な頭頸部癌の代表と言えます。進行例においても、なるべく音声機能を保存できるような治療に最近は取り組んでいます。少なくとも甲状軟骨を破壊するようなIV期の癌や、高齢者では喉頭全摘が選択されます。なお、喉頭全摘後の音声再獲得の方法やその指導にも力を入れています。

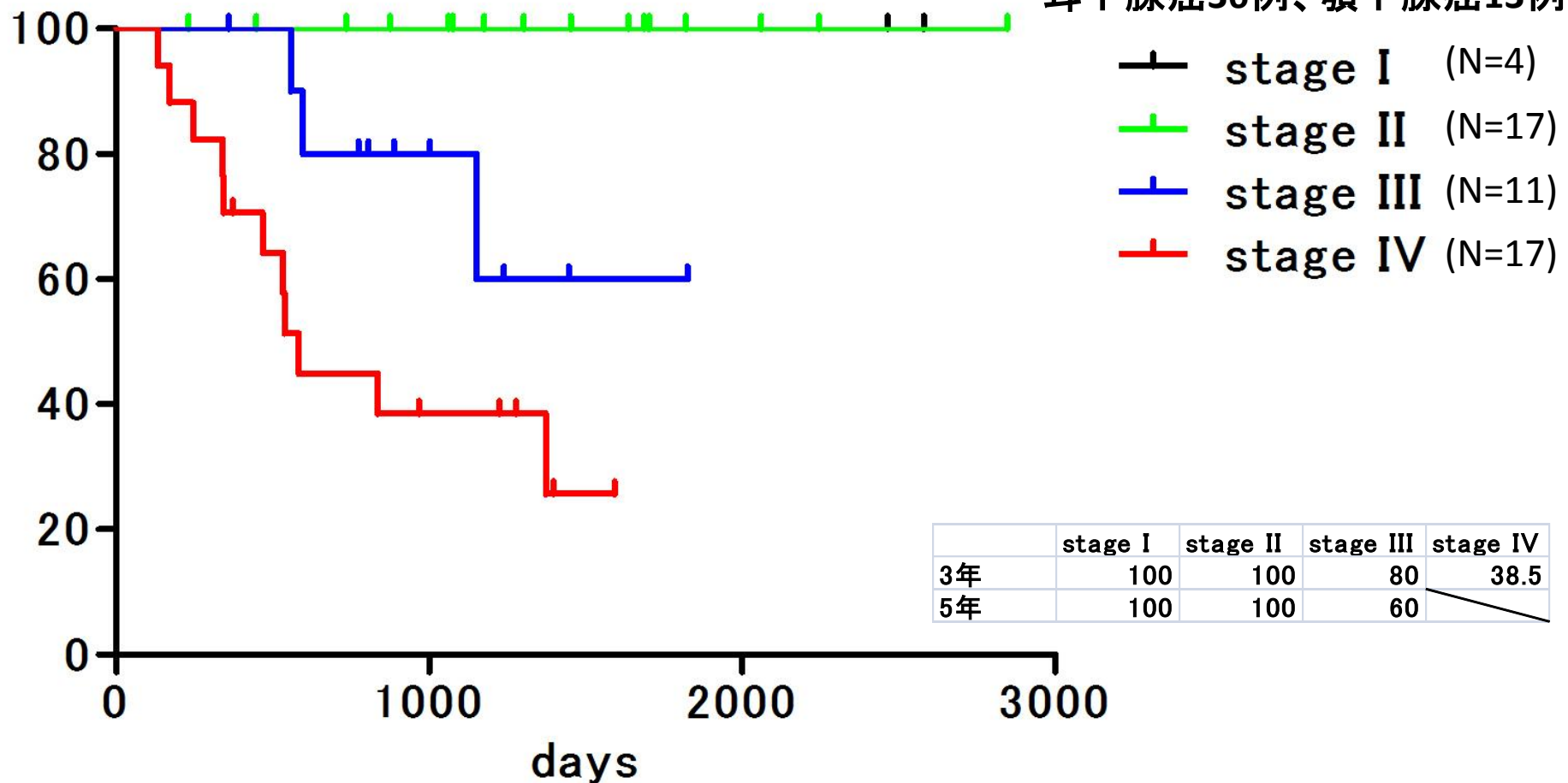
下咽頭癌疾患特異的生存率 2008年9月～2012年8月: 139例



下咽頭癌ではIV期の成績が不良です。のどにできたがんと首のリンパ節転移を制御できても、肺などへの遠い所へ転移して亡くなる方が多いのが特徴です。また、ここでは疾患特異的な生存率を示していますが、食道癌や胃癌を合併される方も多く、そのため亡くられる方も実際はいらっしゃいます。当科ではなるべく音声機能を保存できるような治療を最近は積極的に取りいれていますが、逆に嚥下機能が保たれなければ治療後の生活が成り立ちません。根治だけでなく治療法の選択の面でも悩ましい癌といえます。

大唾液腺癌疾患特異的生存率

2003年9月～2012年8月: 49例
耳下腺癌36例、顎下腺癌13例



大唾液腺癌では一般にその3/4が耳下腺癌、1/4が顎下腺癌となります。
当科では画像診断を基に浸潤範囲を正確に把握し、原発巣の完全切除を基本方針としていますが、
I期、II期は病理学的悪性度にかかわらず良好な成績です。
一方、IV期の成績は他部位の頭頸部癌よりも不良で、これには頸部リンパ節転移の有無が大きく
関わっています。